

第1日 しりとり型

演習問題01

解答 問1 人間以外の動物は情報伝達の一般的な原則として1つのメッセージにつき1つの鳴き声を使うこと。問2 およそ30ないし40の示差的特徴のある言語音 問3 (a) unlimited (or unrestricted or infinite) (b) restricted (or limited) 問4 【全訳】の下線部(3)を参照。問5 少数の単語からさえも無数の文を作り出すことができるという人間の言語の特性。

考え方 問1 *this* は、前文の新情報を受け継ぐことが多い(ここでは **that all other animals use one call for one message as the general principle of communication**) (→K02)。典型的なしりとり型である。ただし、*this* や *that* は、前文を丸ごと全部受け継ぐこともある。

【文のつながり】 * 枠内の太字は新情報、斜字は旧情報である。

One very important distinction is **that all other animals use one call for one message...**

(1) **This** means that the number of messages is very restricted.

問2 下線部の *These sounds* は、前文の新情報を受け継いでいる。「*These* + 名詞」の形に注目 (→K02)。

【文のつながり】 * 枠内の太字は新情報、斜字は旧情報。これもしりとり型の典型例。

In a typical ... there are **something like thirty or forty distinctive speech sounds**.

(2) **These sounds** can be combined into chains to form a literally unlimited number of words.

問3 空白部 (a) と (b) を含むこの文は、人間の言語と他の動物の鳴き声の重要な違いを述べた文である。第1パラグラフ(以下、1パラと略記)の第3文の the number of messages is very **restricted** と、2パラ第3文の a literally **unlimited** number of words に注目。特に key words である **restricted** と **unlimited** が重要。

問4 *who* は非制限的用法なので、解答例のように「訳し上げない」ことがポイント。*that* は a system for communication を先行詞とする関係代名詞。これは制限的用法なので、訳し上げる。**infinitely** の基本的意味は「無限に、大いに」だが、ここでは superior to という比較級とともに使われているので、「はるかに」と訳すとよい。**any system** と **any other animal** の **any** は、肯定文の中で使われているので、「どんな～、いかなる～」と訳す。

問5 下線部(4)の *This basic property of our languages* は、「*This* + 名詞」の例である (→K02)。この下線部は、前文の新情報を受け継いだもの。

【文のつながり】 * 枠内の太字は新情報、斜字は旧情報。

Through this process **we are able to create an infinite number of sentences...**

(4) **This basic property of our language** allows humans to express ideas that can be as...

語句・表現 L1 in many ways 「多くの点で」。ここでは、ways は「方法」ではない。L2 for～

「～につき、～に対応して」。この for は、each や数詞の前で使われる。【例】The fee is 13 dollars for each course. (授業料は1科目につき15ドルです)。L4 be to be included 「取り入れなければならない」。be to 不定詞の用法の1つで、「義務(～しなければならない)」を表す。ここでは不定詞の部分が受動態で用いられているので、字句通りは「取り入れられなくてはいけない」となるのだが、日本語ではこのような場合は受動態にしなくてもよい。L7 build on～ 「～に基づく」L7 combine A into B 「Aを組み合わせてBを作る」L8 something like～ 「およそ～」。ここでは、「～のようなもの」ではない。【例】something like \$10 billion 「およそ100億ドル」L12 while 「(対比を示して)一方」L14 allow 「可能にする」。ここでは「許す」ではない。L16 property 「特性、特質」L18 as to～ 「～について、～に関して」L18 in principle 「原理的には」

【全訳】人間の言葉は他の種の鳴き声とは多くの点で異なっている。1つのきわめて重要な違いは、他のすべての動物は情報伝達の一般的な原則として、1つのメッセージにつき1つの鳴き声を使うことである。(1)このことは伝達可能なメッセージの数が非常に制限されることを意味する。仮に1つの新しいメッセージをその方式に取り入れなければならないとすると、1つの新しい音も導入しなくてはならないことになる。最初からある20ないし30の音に加えて、新たに特徴のある音を創り出すのは難しいし、次回必要な時のためにそれらの音を覚えていたのも難しいことになる。

人間の言葉は、数の限られた音を組み合わせるにより、無数のメッセージを作るという原理に基づいている。典型的な人間の言語には、およそ30ないし40の示差的特徴のある言語音が存在する。(2)これらの音声を鎖のように組み合わせて(←これらの音声を組み合わせて鎖状にして)、文字どおり無限の数の単語を作ることができるのである。(3)幼い子供は1度に1つの単語だけでしか意思を伝えることができないのだが、そうした子供でさえも、他のどの動物が使うどの方式よりもはるかに優れた意思伝達方式を用いている。(人間の言語の)単語の数は無限であるが、一方他の種はごく限られた数の信号しか持っていない。

これに加えて、人間の言語はいくつかの単語を組み合わせて1つの文を作ることもできる。この過程を通して私たちは、少数の単語からさえも無数の文を作り出すことができる。(4)私たちの言語のこの基本的特性により、人間は望む限りの複雑で微妙な概念を表すことができる。この方式には、どのようなメッセージを伝えることができるかについては理論的境界はない。原理的には、どんなことでも語ることもできるのである。

主題文についての追加情報

①主題文の役割は、本体<問題編>のp.24で解説したように、筆者の主張を述べることである。これ以外に、主題文は単にパラグラフの主題を表すことがある(→演習問題09)の2パラの第1文)。②単に事実を列挙しただけのパラグラフには、主題文がないことが多い(→演習問題04)。また、直前のパラグラフに従属しているパラグラフにも、主題文が存在しないことがある(→演習問題10)の3パラ)。③主題文の中には、パラグラフの主張や主題ではなく、文章全体の主張や主題を表す場合がある(→演習問題06)の1パラの第1文。ちなみに、それに続く第2文はパラグラフの主題文。2パラと3パラでは、それぞれ第1文がパラの主題文である)。④主題文がパラグラフの中に2つ以上あることがある(→演習問題23)の3パラなど)。